ルソーの女性観について

久留島　京子

(1)

ルソーほどその生涯において、また死後においても、さまざまの毀誉褒貶をその身にかぶった人はまれである。しかも、思想のひろい領域においてその後の時代に大きな影響を与えたかれを位置づける試みは数多いが、そのどれとてもルソーへの愛憎の念とからみあわせて扱っている、という感を免れない。

ところが、かれの女性観に関するかぎり、おおかたの意見は一致しているように思われる。たとえば、古くは「女性の権利の擁護」をあらわして婦人論の祖とされているイギリスのウルストンクラフト[1]はイギリスにおけるフランス革命の余波のたかまりの中で、フランス啓蒙思想への深い傾斜を示しながらもルソーの女性観に対しては口をきわめて非難の言葉をあびせかけている[2]。

その後の一般的な評価としても次のようなものをあげることができよう。

「ルソーは婦人をもって男子の便益のために存在するものとし、婦人の服従を主張した[3]」

「実は大革命の思想上の背景となった人民主権や天賦人権や自由平等をといたジャン・ジャック・ルソー自身でさえ決して女性に有利な論者ではなかった」のであり、「寧ろ極端なる非女権論者であった[4]。」

また、ルソーの女性観を小生産者層の立場からのものとするユニークな論もあるが、それも「女性劣視」の思想とよんでいる点は同様である[5]。

ルソーの女性観についてのこの様な理解はかれの社会観や教育論を高く評価する立場におけると同様、否定的にみる側からも与えられるところのものである[6]。

たとえばルソーについて極めて批判的なデヴィッドソンにおいてもそうである。ルソーを以て「自身敏感にして懶惰な、そうして訓練されない人物であり、すべての道徳的抑制に耐えられなかった[7]」とするかれは、エミールの受けた教育は、利己的、非社会的、肉感的なものであり「育ちのよい犬の受ける教育と異ならない」と断言する。そして、ルソーの女子教育に関する意見については「われわれの予期しうる通りのものである」として次のような引用をしている。この箇所は、ルソーの女性観の中心的な部分でもあるので、少し長くなるがそのまま引用してみたい。

「女は、男を悦ばせるために作られた。……だから、女子教育はすべて、男性に関連したものでなければならない。男性の気に入ることその役に立つこと、男性が幼い時には養育し、大きくなれば世話をやくこと、彼らのために、生活を楽しく、快いものにしてやること、こういうことが、あらゆる時代を通じて女性の義務であり、また、女性に小さい時から教えこまなければならないことである。……女性は抜け目なく、よく働かなくてはならぬ。……彼らは最初から束縛のうちに働き、それは彼らに何の苦もないように考えられなくてはならぬ。また他人の意志に服従するために、彼らの想像を征服するように教えられなくてはならぬ。……この慣習的束縛の結果として生ずるも

のは従順であって、これは女性が如何なる生活に処しても必要なことである。何となれば彼らは、必ず男性の判断以上に出ることを許されず、従って男性又はその判断にどうしても服従しなくてはならぬからである。女性の第一の、そして最も大切な美点は、温順ということだ。男性という不完全な存在、しばしば、悪徳だらけで、いつも欠点だらけの存在に服従するように生まれついている女性は、早くから、不正をさえ忍び、夫の無理無体を不平も云わずに我慢することを、早くから学ばなければならない。……⑧」

右に引用したところをみれば、たしかにルソーの女性観は女性蔑視非女権論……といわざるをえない。しかし、ルソーの思想をもっと全体にわたってよみとるならば、そしてかれの人間性とかかわらせて考えてみると、必ずしもそうとのみ云いきれないように思われる。女性観を検討するに先立って、若干の考察が必要となる。

① Mary Wollstonecraft, A Vindication of the Rights of Woman, 1792. (Everyman's Library, 1955)

② それは随所にみられるが、たとえば「私はこの有能な作者の天賦の才能を心から讃嘆するのだが、彼の放蕩な空想をよむとき、いつも怒りが賞讃にとってかわる。」「ルソーは……女性は一瞬たりとも自分自身を独立したものと感じてはならないし……男にとってなまめかしい奴隷たらしめねばならぬとしている……」Ibid., pp.29～30. また女子教育における「ルソーの基本的原則は狡猾と好色の体系へみちびく。」p.87.

③ パーム・ダット。(青山道夫、後藤清著「婦人の解放」六頁より引用)

④ 永井亨「婦人問題研究」一二頁、二二一頁。

⑤ 水田珠枝「近代思想における女性の従属―ルソーとバークを中心に―」(歴史学研究、二五五号)

⑥ 尤も桑原武夫編「ルソー研究」第十三章「ルソーの教育論」の「討論」部分での「ルソーは男女の無差別な平等論や男女優劣論に反対している」という発言は注目される。

⑦ T・デヴィッドソン著、小林澄兄訳「世界教育史」一四五頁。

⑧ 同書、一四八―九頁。この「エミール」からの抜萃は、後に引用する都合から、その一部は平岡昇の訳文をあてた。(ウルストンクラフトは先にもふれたようにルソーの思想全体に対しては評価するが、女性観に関してはこのデヴィッドソンと重なる箇所を数多く引用してそれに反論の筆をとっている。)

(2)

まず第一に、かれの生きた時代(一七一二―七八)に目を向けよう。

フランス革命の歴史的意味はここで論ずるものではないが、そこにおける「人間と市民の権利」は、l'homme=男と市民のそれであり、女性は全く問題の外にあったこと。フランス革命の人間解放において女性の解放は全く問題にならなかったこと。このことは、「人権宣言」に対して「女権宣言」を行なったグージュ女史が革命の中心人物たちによって弾劾され、ついにはギロティンにかけられたことやその後の民法において、女性の地位が極めて低く規定されたことに端的に示されよう。

こう考えてくると、革命前に生きたルソーにおいて、当時の社会構造の中での女性の隷属や女性の社会的地位の低さなどは念頭にも浮かばなかったとしても不思議はない。

むしろ男女の差異は自然なものであって異なった特性をもつ両性によって社会生活、家庭生活はなり立つものとして、その点にかれの視野が限定されたことは否めない。かれが問題にするのは家庭生活の中における女性であり、男女両性の結合を幸福にし、平和な家庭生活

を営むものとしての女性の生き方なのであった。だからそれをこえて社会的に女性の生きる場を見出すことや社会的な活動を女性に期待する立場からルソーの女性観を論ずることはいささか的はずれになってしまう。

そのことは、ウルストンクラフトがルソーの女性観に加えている憤りにみちた論評にもあてはまると思う。しかしそれらの批評は、あくまでもウルストンクラフトが女性の生き方をルソーとは違ったディメンションでとらえているからなのであって、家庭をこえた女性の生き方を追求したところにこそ、ウルストンクラフトの思想の意義があり女性論における始祖としての彼女が高く評価される所以でもある。そしてそれは産業革命をへたイギリス社会において、家庭の外へとかり立てられてゆく女性の群像を目のあたりにしたウルストンクラフトの時代の問題であったともいえるのである。

ところでルソーの時代に社会的に注目される女性が存在しなかったというのではない。それどころか当時流行のサロンにおいて、才智を誇る教養ある貴族女性たちの勢力は、きわめて顕著なものであった。政治をかたり、文芸、哲学を論じたこれらの女性は、当時の思想界に少なからぬ影響を与えたばかりでなく、アカデミーにまでも影響を及ぼしたことはよく知られた事実である。マダム・ポンパドゥールは特殊なものとしても、政治を動かす陰然たる力としてのこれら貴族女性たちの権勢はある意味においてはフランス史の中でもきわ立っている[1]。

そしてルソー自身はその様な女性達と交わる機会も少なからず、また、好感をもったり恋愛感情を抱いたりしたこともないわけではなかったけれども、かれが否定する貴族社会、人工的な腐敗せる不自然な生活の中に見出す女性たちは、しかしかれの批判の対象となったのである[2]。

この点は、ルソーの女子教育論をみるときに念頭においておかなければならない。というのは、ルソーにとって教育の目的は、子供を既存の社会の中においてその悪い影響から守ることである。即ち、社会の中に生きている自然人をつくることなのである。既存の社会を堕落したものとしてその改革を考えるルソーは現実の社会においておこなわれている教育を否定する。そして一定の環境（ここではアンシャン・レジーム下のフランス社会）に適合する人間をつくるという既存の教育に反対して自然のままの人間をつくることこそが教育の目的と考えるのである[3]。

従ってルソーはいう。自然の状態に近い田舎に住む子ども、農民の子供たちには教育はいらない……彼らは自然の中で育つのだから[4]。また、貧乏人にも教育の必要がない。彼らは自分の力で人間になることができるのだから……[5]。ところが金持や貴族は、そうはいかない。彼らが「その境遇からうける教育は、かれにとっても社会にとっても、もっとも不適当なものだ」から、この人たちこそ教育をうける必要がある、というのである。つまりその身分、境遇のゆえに、「人間になる」のが困難な階級の子弟の教育が「エミール」で展開されるのである。この点は、第五篇で述べられる女子教育にもいえるのであって、そこでかれの念頭にうかぶのはかぎられた女性であるということも考慮しておく必要がある。

① しかし、そのことは女性の政治的、法律的な地位や経済的独立とは無関係である。また、当時のガラントリからして、男性は落としたハンケチさえ女性が拾えないかのようにかけよったり、部屋から部屋へ移る女性にまるで危険な道を渡るように手を貸すのがふつうであったとしても、女性の地位の高さを示すことではない。この点については、ルソーも観察している。

女性の権威は「愛情をも尊敬をも前提としているのではなく、単に礼儀と社会の習慣とを前提としているだけなのです。なぜなら、他面において女性を軽んずることは女性に奉仕することに劣らずフランス風のガラントリには本質的なことなのですから。」「新エロイーズ」安土正夫訳、岩波文庫(2)一五二頁。

② 一八世紀の上層階級にとっては、社交生活がすべてであったといっても過言ではあるまい。この時代の貴族の夫人たちは恋人をもつことが許されないどころか、むしろその数の多いことを誇るという有様であった。多くの男性に囲まれてはなやかなサロンで才智をひけらかしている女性は、ルソーの嫌悪するところであった。ルソーは「学問・芸術論」の中で、「人気の出てきた学者たちが、軽俳浮薄な若い女性に一座の音頭をとらせたり、男たちがその趣味を彼らの自由の圧制者のために犠牲にしたり」することを嘆いている。Jean-Jacques Rousseau: Discours sur les sciences et les arts, 1750 (Oeuvres Complètes de J.J. Rousseau, Tome I) pp. 29～30. 平岡昇訳「学問・芸術論」（世界の名著30）八四―五頁。

③ ルソーは万人が本質的に平等だという立場を根底に教育を論ずる。「自然の秩序のもとでは、人間はすべて平等であるから、その共通の天職は人間という職業である。だからそのために教育された人ならば誰でも、人間に関することをうまく履行できない筈はない。」J.J. Rousseau: Émile ou de l'Education, 1762. (Classiques Garnier, 1951.) pp. 11～12. 平岡昇訳「エミール」（河出書房、世界の大思想、17）十二―三頁。

④ 「新エロイーズ」(3)二七五頁。

⑤ Émile, p. 27. 訳書、二六頁。ところで、アンシャン・レジーム下のフランスで民衆がきわめてわずかな教育の機会しかもたなかったことは、次の数字にも示される。結婚証明書への署名率が一六八六―九〇年の平均が、男二九%、女一四%。一七八六―九〇年の平均でさえ男四七%、女二七%。梅根悟編「世界近代教育史」二三頁。

(3)

社会的、時代的背景とともに重要なのはルソーの生活である。

「わたしの誕生はわたしの不幸の最初のものとなった①」と自らのべるように、母はルソーを生むと殆ど同時に死んだのである。母を愛してやまなかった父が、幼いルソーをあいてに涙にかきくれながら亡き妻の話にふけったことは、生まれつき感受性の強かったルソーに一入母への思慕をつのらせることとなった。そうして美化された母のおもかげが、ルソーの理想の女性像と重なっていくのである。最初の愛人ヴァラン夫人が、ルソーより十二才年長であったこともこのルソーの母親への思慕と無縁ではないようである。ヴァラン夫人は実際にはルソーの描く程の美徳の権化ではなかったようであるけれども、ルソーはこの女性を「ママン」とよび終生憧憬の念を抱きつづけたのである。

ルソーの求めたのは母性的な女性であったという点で一貫しているように思われるが、のちにかれが結婚するテレーズは、下宿の女中、かれより九才年下であった。彼女は美貌とも美徳とも程とおかったようであるが、かれの表現によると内気な、「素朴で気どりのない娘」で、その後の生涯、ルソーは彼女を伴侶とすることになる②。しかしその間にもドゥドト夫人への、かれにとって「全生涯ではじめての、たったひとつの恋」がうまれ、「力のかぎり猛り狂った恋」の一時期を経験するが時ならずして破局を迎える③。

その他にもルソーは、「告白」の中にのべるところによると、ゆきずりの女性との官能だけの関係を何度かもつのだが、のちにかれがかえりみてただ一人の女性とするのはやはりヴァラン夫人であった④。

かれは、心も官能もともにみたしてくれる女性を求めてえられなかった……そして、それはむしろ現実をはなれて vertu の化身として高められてゆくことになる。

そのひとつの典型が「新エロイーズ」におけるジュリであろう。ここでサン・プルーが敬愛憧憬してやまぬジュリは、美徳を身につけた理想の女性としてたちあらわれる⑤。

また「エミール」の中で「美徳は、恋愛にとっても他の自然の権利にとってと同じように有利であり」恋愛が真のものであるのは、完璧なものをみて人が心をもえあがらせるからである、とのべていることに対応する。ルソーが美徳をきわめて重要なものと考えており、その美徳においては男性も女性もかわらないという点を根本の立場としていることは、おさえておく必要がある。

① Jean-Jacques Rousseau: Confessions. (Oeuvres Complètes de J.J. Rousseau, 1827. Tome 15.) p. 23. 桑原武夫訳「告白」（世界文学大系、17巻）六頁。

② Ibid., Tome 16. pp. 94～99. 同書、二〇六―八頁。

③ ドゥドト夫人は、「性格といえば、これは天使のよう。やさしい魂がその根本だったが、慎重さと力強さとをのぞけば、ほかのあらゆる美徳をあつめていた」と描かれるが、（Ibid., p. 284. 同書、二七八頁。）彼女との恋は「新エロイーズ」と深くかかわっている。

④ 五〇年のちに当時を回想していう。「わたしの一生で……わたしが完全にわたし自身であった、たったいちどのみじかいあの時期、ほんとうに生きたといえるあの時期」「あふれるばかりの親切と優しい心をもったひとりの女性に愛されたわたしは、……彼女の教えとお手本に助けられ、まだ素朴で純真だった自分の魂にさらにふさわしい形態をその後たえて変わらなかった形態をあたえることができたのだ。」今野一雄訳「孤独な散歩者の夢想」一六三―四頁。

⑤ ルソーにあっては徳 vertu は最高の価値である。「徳という言葉は力という言葉からきているのであり、力があらゆる美徳の根底にある」からして意志の力によって情念を克服することを意味する。従って有徳であるとは自分の理性、自分の良心に従うことであり、そのことは自己に忠実であることなのだから、有徳であってはじめて人は自分自身の心に命令することができる。そして、自己の良心を満足させるように生きるところにこそ本当の幸福がえられると考えられている。

(4)

ルソーの女性観がのべられているものとして屢とりあげられるのは「エミール」第五篇である。そこでルソーにとって理想的に教育されて青年期に達したエミールに与えらるべき女性ソフィが登場する。第四篇までの「エミール」では、私たちに息もつかせぬ程の力で、新しい人間の教育が、かれの他の社会理論の著述の中にみられる人間愛をこめて描かれている。そこに突如として全く女性に「無理解」な考え方があらわれ、人権から排除され、その人格が全て「男子の便益のため」にのみ存在するという人間が登場する、とすれば、それはどの様な論理の展開によるものか。

しばらくルソー自身をしてかたらせよう。ルソーは、男性と女性とを比較して次のように云う。

「性に関係のないすべての点では、女は男と同じである」が、「性に関係のあるすべての点においては、女と男には、あらゆる点で関連があり、あらゆる点で相違がある。……この両者を比較することがむずかしいのは、両性の構造において、性に属するものと、そうでないものとを決定することがむずかしいためである。」

しかし、「両者に共通なものはすべて種に属していること、違って

いるものはすべて性に属しているということ」であり、男女はたがいに比較できないものなのだ。「完全な女性と完全な男性とは、顔が違っているように、精神も似ていないはずである[11]。」

ここにあきらかなように、ルソーにおいては単なる男女の比較は問題とならず、男性は男性として、女性は女性としての価値基準をもつということが強調されるのである。かれは、もっとも女性らしい女性こそが理想だとする。

それでは女性らしいとはどういうことか。ルソーはいう。

「両性の結合においては、どちらも同じように共通の目的に向かって協力しているが、同じやり方でしてはいない。この相違から、両性の間のいろいろな精神的な関係のなかに、はっきり指示できる最初の違いが生まれてくる。一方は、能動的で強く、他方は受動的で弱くなければならない。」

男は女なしでも生きてゆけるだろうが、女は男なしでは生きてゆけない。従って、女に必要なことを男が与えてくれることが必要なのであり、そのためには男が与えようと思うだけの値打をもつことが必要となってくる。つまり、女性は、男性にみとめられるだけの値打をもつこと。男に尊敬されるだけの価値をもつこと。いや、実際に尊敬されるものでなければならない……「女子教育はすべて、男性に関連したものでなければならない。」

先に引用したところであるが、

「男性の気に入ること、その役に立つこと、男性から愛され、尊敬されること、男性が幼い時は養育し、大きくなれば世話をやくこと、彼らに助言を与えること、彼らを慰めること、彼らのために、生活を楽しく、快いものにしてやること、こういうことが、あらゆる時代を通じて女性の義務であり、また、女性に小さい時から教えこまなければならないことである[8]。」

ここのところが、単に男性と別個の、というだけでなく、男性のための、男性中心の女子教育論といわれる所以でもある。

しかしルソーが描き出している女性のつとめとは、他ならぬ母親の役割であり、主婦の仕事に他ならぬ。彼にとって、それは男性とは別個の、女性でなくてはなしえぬ、それ故にこそ女性にとって重大な責を負わすべきこととしてとりあげられるのである。

ルソーにとって「疑う余地がない女性の義務」は子供を育てる母親の役割である。しかるに、当時のフランスではどうか。「母親たちがその最初の務めを軽んじて、もう自分の子供を養おうとはしなくなってからは、子供は金でやとわれた女たちに預けられねばならなかった」のである。

これは明らかに上流階級のことであるが、ルソーはこの不合理な、不自然な慣習がまず生まれたばかりの子供を、自然に反したものとし、自由な成長を妨げることになるという。子供が産衣にくるまれ、身体にあらゆる種類の肌着やひもをまきつけられて、不活動と束縛の状態にとどめおかれることから、子供の不幸がはじまる。

「子供から解放されて、陽気に都会の楽しみにひたっているやさしい母親たちは、産衣につつまれた子供が、村でどんなあつかいを受けているかを知っているのだろうか。ほんの少しさわぎたてただけでも、子供は古着の包みみたいに釘にひっかけられてしまう。そして乳母がゆるゆると用をはたしている間、あわれな幼児はこうして釘づけにされているのだ。こんな状態にいるのを見かけた子供たちの顔は、みな紫色をしていた……[8]」

この子供たちの描写はまだつづくのだが、つぎにルソーがこの不自然きわまりない慣習をたちきることを主張するのは、当然である。すべての人をその第一の義務にたち返らせようと望むなら、「まず母親

から始めたらよい。」

「万物を創る神の手から出るときにはすべては善いが、人間の手にわたるとすべてが堕落する[4]」とは、「エミール」の有名な冒頭の言葉であるが、だからこそルソーにとっては最初の教育こそ大切なのである。しかも、「その最初の教育は疑いもなく女性の仕事[5]」なのである。（もし自然の創造者がそれを男性の仕事として望んだのなら、子供を養うための乳を男たちに与えたことと思われるから。）それだのに、母親たちに十分な権威が認められていないのは、法律というものの目的が平和にあって美徳にはないので、いつも財産には大いに関心を払うけれども、人間にはほとんど心を用いないからだ。ルソーはつづける。

「それにしても、母親のほうが父親よりもその地位は確実であり、その義務はいっそう骨が折れるし、その心づかいは、家庭がよい秩序を保つためには、いっそう重要である。……息子が父親に対して尊敬の念を欠いても、とにかく許される場合はある。しかしどんな場合にせよ、もし子供が彼をその腹に宿し、自分の乳で彼を養い、幾年もの間われを忘れて彼のことにだけ専念してきた母親に対して、尊敬を欠くほどに本性を失ったとしたら、そういう浅ましい人間は生きるにも値しない怪物として、すみやかに息の根を止めてもよいだろう。」

さらに人は「母親が子供を甘やかす」というけれども、その点で母親はたしかにまちがっているとしても、子供たちを堕落させる父親たちの野心、貪欲、圧制、間違った見通し、投げやりな態度と無情な鈍感さの方が、「子供たちにとって母親の盲目的な愛情より百倍も有害である。」

しかし、だからといって、ルソーが母親に父親と同等の、或はそれ以上の権威をもたしめるべきだなどといっているわけではない。このことは、「政治経済論」の国家と家族、国政と家政を対比している部分に、少しくふれられている。彼はいう。

「事物の本性からひき出されるいくつかの理由によって、父親は家庭において支配権をもつべきである。第一に、権威は父と母とのあいだで平等であってはならず、支配は単一であることが必要で、意見が分かれたときには、それを決定する優越的な声が一つなければならない。二、婦人には活動できない時期が常にあるというような、婦人にのみ特殊な不都合と考えられる事柄は、いかにそれが些細なものであろうと、婦人を第一位から除外するに充分な理由である。なぜなら、衡りが完全に釣り合っているときには、（傍点筆者）それを傾けるために、一本の藁があれば充分である。その上に、夫は妻の行為を監視している必要がある。というのは夫が認知し養育することを強制される子供達が、彼以外の他人の子供ではないことを確認することが大切である。妻は、こういう心配を少しももたないから、夫に対して同等の権利をもたないのである[6]。」

ルソーのべる父権の根拠から、女性蔑視がよみとれるであろうか[7]。尤も、「夫は妻の行為を監視している必要がある」というくだりには若干問題があるように思われるが、しかしこの点は、娘に対してはきびしく純潔を要求しながら、一旦妻となった女性に対しては極度の自由をみとめていたフランス社会 ―とりわけ上流社会― を念頭におかねばなるまい[8]。

こうみてくれば、そのような条件さえのぞかれれば、家庭の姿は変わってくるのである。ルソーはいう。

「あなた方がすべての人を、その第一の義務にたち返らせようと望むなら、まず母親から始めたらよい。あなた方は自らひき起す変化に驚くだろう。なにもかもこの最初の堕落（母親が自分で子供をそだて

ないということ―筆者）から次々に起こっているのだ……しかし母親がてずから自分の子供を育ててやるならば、風俗はおのずから改まり自然の感情が誰の心にも目覚めてくる。……父と母とは、お互いにますますなくてはならぬものになり、睦みあうようになり、夫婦のきずなはいっそう強くなる。家庭が生き生きとして活気があれば、家庭の世話は、妻にとってこの上なく大切な仕事となり、夫にとってはなによりも快い楽しみとなる。こうして、このたった一つの弊害を正しただけで、やがて全体の改革がもたらされ、間もなく自然はその権利をすべて取り戻すだろう。……⑨」

① Émile, pp. 445～6. 前掲訳書、四〇三―四頁。
② Ibid., p. 455. 同書、四一二頁。
③ Ibid., pp. 15～17. 同書、一五―七頁。
④ Ibid., p. 5. 同書、八頁。
⑤ Ibid., pp. 5～6. 同書、五六五頁。原注㈠
⑥ J.-J. Rousseau : De l'Economie politique. (Oeuvres Complètes de J.-J. Rousseau, 1827. Tome I) pp. 409～10. 河野健二訳「政治経済論」九―一〇頁。
⑦ 妻の地位について「エミール」の中で「女性は国家をつかさどる大臣のように家のなかに君臨しなければならない」としている。よく治まっている家庭はかならず妻のほうが権威をもっている家庭だということになる、といいながらもやはり、家長の権利は夫のものであり、それによって秩序が維持されるべきことがとかれている。Émile, p. 517. 訳書、四六九頁。
⑧ この当時、夫婦愛はむしろわらうべきこととされ、姦通は公然のこととされていた。家族をもって「あらゆる社会のうちもっとも古く唯一の自然なもの」とするルソーは、夫婦の愛によって結ばれる家庭の秩序を重んじ、それこそが社会秩序の基礎だと考える。「新エロイーズ」でも女主人公ジュリの娘時代の恋は甘美にえがかれるが、父の意志に従って他の男と結婚してのちは、恋をすててひたすら徳を貫くものとして描かれる。当時のフランス社会の乱れについては屢のべられている。身分や財産などが結婚成立の重要な要因となっているこの社会では「愛のきずな」などというものはなくなってしまっており、「母たる女が二十人の愛人を持つ方が、その娘がたった一人の愛人を持つよりもよいとされている……ここでは姦通は人を憤慨させません。……パリでは……結婚とは同棲すること、同じ姓を名乗ること、同じ子供たちを認知することに同意する……二人の自由な人間の協約としか見えません。」「新エロイーズ」(2)一四四頁。
⑨ Émile, p. 18. 「エミール」一八頁。

(5)

家庭には終生めぐまれなかったといってもよいルソーにとって、家庭とは、自分のあこがれてえられなかったもの、やさしい母親＝主婦の愛につつまれたものでなければならなかった。

かれが「告白」で追いもとめている母への憧憬。また、やさしく育んでくれた叔母や牧師の妹へのなつかしさをこめた追憶。「ママン」とよんだヴァラン夫人の母性的な愛や不満をもちながらも、その性質のやさしさ故に半生をともにしたテレーズのこと。これらが、ルソーをして女性のあるべき姿は、やさしい母であること、家庭をよくとりしきるあたたかい妻であることとして描き出させたといえよう。

この様なものとして読み直してみるならば先に引用したルソーの描き出す女性は、異なった意味をもって浮かびあがってくる。煩雑をいとわず再びその一部を含めて引用してみよう。

「母親の体質がよいか悪いかに、まず、子供の体質は依存している。女性の配慮がどうあるかによって、男性の最初の教育は決定される。さらに女性によって、男性の品位、情念、嗜好、快楽、幸福さえ

も左右される。だから、女子教育はすべて男性に関連したものでなければならない。男性の気に入ること、その役に立つこと、男性から愛され、尊敬されること、男性が幼いときには養育し、大きくなれば世話をやくこと、彼らに助言を与えること、彼らを慰めること、彼らのために、生活を楽しく、快いものにしてやること、こういうことが、あらゆる時代を通じて女性の義務であり、また、女性に小さい時から教えこまなければならないことである。」①

「男性の気に入ること」という表現に問題はあるけれども、この女性像は、現代の私たちの周囲につねに見出すものであろう。むしろ、現在のふつうの家庭の婦人たちの姿、そしてある意味では、（少し誇張になることを承知であえていえば）ひとつの理想像ともいえそうである。

もちろん、ルソーが女性に男性と同様の教育や職業を全く否定しているという点では、決して男女平等をとなえるものではない。このことは、「無理解なる非女権論者」の名を冠せられ、ウルストンクラフトを怒らせもするのである。

しかし、すでにのべたことからもわかるように、ルソーは、もともと男と女は違うのだ、という立場でものをいっている。しかもそれは女性を劣等視するというのではなく、男は男であり、女は女である。その違いから社会における役割のちがいもあるのだ、という論へとすすむのである。この点は、現代通用している男女平等論が、むしろ男も女も全く平等であり、同じ権利をもつということをうたいあげながら、実は却ってそのことのために女性の立場を低めている場合もある点と対照的であるとさえいえるのではないか。男女平等というかげに、実は劣等なるものとしての女性への蔑視が少なからずこめられている場合にくらべることもできるだろう。

ともあれ、ルソーは一八世紀の人であり、アンシャン・レジームのフランスに生きた人である。その女性観に、現代のわれわれが距離を感じるのは当然である。しかし、民主々義者であり啓蒙の子であるルソーは「極端な非女権論者であった」という一面的な評価はやはり当をえていないように思われる。「矛盾にみちた人ルソー」として、その女性観をひき合いに出すことも問題である。矛盾にみちている様でも、その底には、ルソーの統一された心情が横わっているのであり②。女性観についても、やはり人間に対する深い愛がここにも貫かれているといえよう。

① 「人間不平等起原論」のジュネーヴ共和国への献辞の中にも次のようにのべられている。女性は「他の半分の人たちの幸福を作り、優しさと知恵によって平和とよき風俗を維持してくれる」ものであり、「女性の運命とは常にわれわれ男性の姓をとることであり、「愛情ある妻の口から出る名誉と理性の声には どんな野蛮な男も抵抗できない。」 J.J. Rousseau, Le Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes. 1754. (Oeuvres Complètes de J.J. Rousseau, 1827. Tom I) p. 226. 小林善彦訳「人間不平等起原論」（世界の名著30）一一〇頁。

② この点については、新堀通也「ルソー」にすぐれた指摘がある。十二頁、三九―四〇頁。

昭和四十四年三月三十一日出稿